慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	母語韻律干渉の特徴とその要因
Sub Title	How the prosodic features of mother tongue interfere in those of the target language?
Author	重松, 淳(Shigematsu, Jun)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.87, (2004. 12) ,p.321(46)- 336(31)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岡晴夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00870001-0336

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

母語韻律干渉の特徴とその要因

重松　淳

Ⅰ　序

乳幼児が生後すぐに注目する母親の音声特徴は、「音韻性」ではなくて「韻律性」[1] だという [2]。韻律の認知と習得（再生能力獲得）には時間差があるとしても、韻律認知が言語習得の始めに位置していることは非常に興味深い。というのは、成人の第２言語音声の習得上最後まで残る問題は、経験的に韻律面であると思われるからである。視点を変えれば、当該言語の母語話者である聞き手から見て、学習者の韻律が最も改善されにくいと感じられる。つまり母語話者では最も早い時期に認知され習得が始まる韻律が、第２言語の学習者においては習得が最も難しい、または遅いと思われるのである。

これが第２言語習得のメカニズムから帰結される結果なのか、または学習方法に起因するものなのか、という点は即断できる状況にない [3]。しかし少なくとも第２言語教育においては、個々の音さえ発音できれば韻律は自然に習得できると考えられてきたために、この韻律の学習方法は未だに確立していないばかりか、韻律の応用研究自体も始まってからまだ日が浅いと言わざるを得ない。

実際に学習者の韻律はどのように現れるのだろうか。まず中国語母語学習者の日本語について観察してみる。日本語の韻律の特徴は大きな「への字型または山型」の連続であると言われるが、中国語母語学習者の日本語韻律には大小の波型がそのなかに起こり、滑らかさが失われて韻律が破壊

される。台湾語話者[4]の場合特に顕著に現れる。翻って日本語母語学習者の中国語[5]についてみると、中国語の韻律の特徴は、大小の波型を呑みこむ大きな孤形を描くと言われるが、日本語母語話者の韻律は大きな孤形を描かず、大小の波形が剥き出しになり、滑らかさが失われ韻律が破壊される。この両者の現象は非常に奇異な感じを与える。双方とも個々の語（句）は正しく発音されるにも関わらず、それ以上のレベルになると急に不自然さが目立つようになるのである。

長年筆者は、日本人に対する中国語教育、中国人に対する日本語教育の現場に身をおいているが、韻律の習得については常にもどかしさが付きまとう。まず母語以外の韻律というものの姿を把握することが難しい上に、なぜ韻律が習得できないのか、その原因が把握できないからである。そのもどかしさを解消すべく、これまで中国語語句の声調（tone）連続と日本語アクセントの間の干渉について観察を続け、その結果を教育に生かす努力を重ねてきた。それは中国語語句の声調連続と日本語語句の高低アクセントの間に、何らかの相互干渉があるのではないかと推論したからであった。

そして1995年に台湾語の声調連続に見られる特徴と、台湾語話者の日本語アクセントの特徴を調べた折、次のような一つの示唆を得た。それは、母語の韻律が第２言語の韻律に直接干渉するかもしれない、ということである。台湾語母語話者の日本語アクセントは、これまでその語の最終モーラの直前に核がおかれやすい（０２型が多くなる）ということが観察されてきた[6]。しかし台湾語話者のパターン化された日本語アクセントは、後から２つ目のモーラに核が来るというより、台湾語の「詞組」（語のまとまり）のうねりに合わせて、日本語の語句を発音し、それが特徴的なピッチパターンを作り出しているのではないか、と思われたのである[7]。つまり学習者は日本語を発音しながら、母語の韻律の干渉を受けるのではないかというのが、その時得た一つの感触であった。その後、広東語話者の日本語アクセントの調査でも、やはり独特のパターンが観察され[8]、そのパターンから見て、そうなる原因は広東語に見られる語句の連続変調（tone-

sandhi）にあるのではないかと思われた。それが正しいとすれば、やはり広東語の韻律が日本語アクセントに干渉すると言えるわけである。

本稿では更に文レベルの韻律における母語の干渉について述べたい。以下では、これまでに明らかになっている中国語フレーズレベル韻律の構造を概観した上で、第2言語として中国語を学んだ中級学習者に見られる文レベル韻律の実際を主にピッチ曲線図を通して例示し、母語の韻律の干渉であると思われる特徴、音声教育の結果であると考えられる特徴を挙げ、従来の中国語音声教育における問題点を指摘し、韻律学習の重要性を主張する。

Ⅱ　中国語の韻律概観———声調とフレーズ韻律、文韻律

まず「声調」は「音節に固有のもの」であると言われるが、「音節」と「声調」は階層を異にしており、「声調」は「超分節的特徴」または「非線性特徴」を持つ。例えばいくつかの音節が連読した際に現れる「変調」という現象についてみると、北京語（ここでは共通語（普通话）と同義に扱う）では、第3声の連続変調に代表されるように、音節毎に決まっているはずの声調が、ある塊にまとまると一人歩きし、パターン化された韻律を形成する。2音節連読による1フットの韻律形成は比較的安定したピッチパターンを示すが、3音節の連読になると、話速（話すスピード）との関連でさまざまなバリエーションが現われる[9]。上海語では、大雑把に言えば一つのフレーズは最初の音節の声調をそのフレーズ全体に振り分けた形に変調し、しかも音程の曲折を失う。台湾語でもフレーズは最後の音節の声調を残し、それより前の音節はすべて変調する。声調が音節固有のものであり音節に密着した分節的な性格を持つのであれば、このような現象は起こらないはずである。この変調現象が韻律形成の基本にあるとすれば、音声教育における変調の優先順位はかなり高いところになければならない。音声教育において第3声の変調は、必ず音声学習の重要項目を占めるが、そのバリエーションやその現われ方などは、中国語の初級音声教育ではほとんど放棄されている。

声調についてもう一つ取り上げたい点は、音節の音長についてである。中国語音声教育の始めの段階でよくなされる、第3声は長く第4声は短いといった音長に関する単純な説明に比べて、事実はさらに複雑だと言わなければならない[10]。特に日本語母語の学習者にとって問題なのは、日本語の耳がモーラ長を聞く耳であり、しかもピッチのみに注目しがちな耳である、という点である。母音として耳に届く音が長くても短くても、日本語のモーラ長に引きつけて聞くために、実際の音長を聞き落としてピッチに注目しようとし、子音にかかる長さなどはほとんど耳に届かない。モーラ長とピッチで中国語の声調を把握するために、すでに全体的な韻律を破壊する前提がそこでできてしまうことになる。

さて次に文レベルの韻律であるが、これは文以上の単位に成立する概念で、それぞれの文にイントネーションが加わって形作られる調子を言う。従って声調連読によるフットや、フット群連読によるフレーズ群の静的韻律記述とは分けて考えなければならない。しかし、後者は前者の階層に組みこまれると、文のイントネーションや文群の韻律の影響を受けると同時に、逆に前者も後者の影響を受ける。この複雑な様相は中国語が声調言語であることから生まれるもので、日本語の韻律と比べると一段複雑であると言わざるを得ない。音節の声調は固有の音程と曲折を持つが、それは無論相対的なものであって、話速が速ければ固有の声調は「変調」を起こし、相対性を保ちながら文韻律に同化する。これらの現象はそれぞれの個別対応で済むほど単純ではなく、中国語学習者への自然な韻律の指導を考える場合には、文韻律は無視できない。

文韻律は「調頭（文頭の音節またはフット）＋調体＋調尾（文末の軽声でない音節または文末フット）」という基本構造を持ち、「調尾」は声調の影響を受けるが、イントネーションは文間、文末のポーズ（無音区間）を含めて文全体に影響する。以下に『汉语节律学』（吴洁敏，朱宏达著2001）の分類に従って文韻律の基本型を示す。

下がり調子　平調：音域が狭く波形は曖昧、句末には言いきり型のマークがある。
遠方からの声かけや、天気予報などに現われる。
降調：山が調頭、谷が調尾に起こり、文末音節（またはフット）は明らかに下降する。陳述文、命令文などの他、聞き手が近くにいる場合の対話などに起こる。

上がり調子　昇調：谷が調頭、山が調尾に起こり、語気詞があると山は語気詞の直前の音節に起こる。疑問文、反問文など。

曲がり調子　凸調：山が調体にあり、谷が調頭と調尾に起こる。文中にストレス、疑問詞のある陳述文など。
凹調：谷が調体、山が調頭と調尾におこる。文頭にストレスのある文など。

フレーズ韻律の層では、声調の基本調値にフットの構成、音節の数、語意などが変数となって韻律を成し、文韻律の層では、フレーズの構成、文意、話速、語気、口調などあらゆる変数が働いて韻律を成す。発話の韻律はすべて総体としての表出であるため、中国語学習者が母語の韻律を捨てターゲット言語の韻律を習得することは、非常に難しいと言える。以下では、文韻律のレベルで、日本語母語の学習者に見られる干渉の実際を明らかにする。

Ⅲ　日本語母語話者の中国語文韻律

中国語の韻律を表出する機能を担うのは主に音程、音長、音強であるが、音声波形を分析することで、少なくとも音程と音長はその振る舞いを具に見ることができる。ここでは、中国語母語話者と日本語母語話者の中国語韻律をピッチ曲線図の形で表現して、実現される文韻律の違いを検証する。

ここで資料として用いるのは、中国語母語話者Yと日本語母語話者Tの

録音音声から波形を取り出したものである。[11]

中国人Y：中国語母語話者、母語は北京語。両親、本人とも北京出身。
日本語学習歴４年。20代女性。

日本人T：日本語母語話者、愛知県出身。
中国語学習歴2.5年、20代男性。

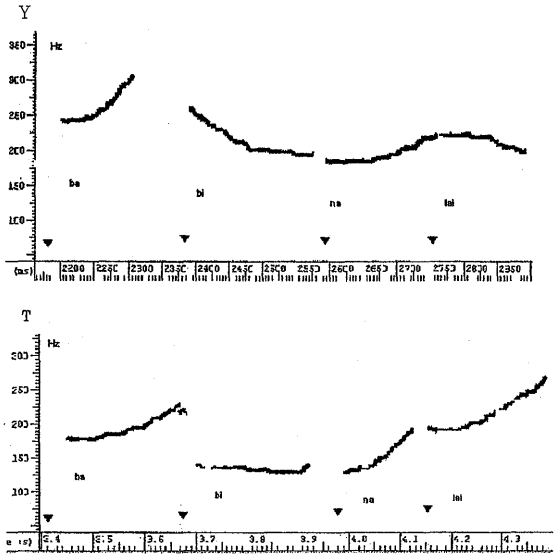
1　下がり調子（降調）と上がり調子（昇調）

【資料①】降調（命令文）

把笔拿来　bǎ　bǐ　nálai.（鉛筆を持ってきて）

命令文は降調になる。【①Y】に典型的な降調が見られる。最後の音節“lai”は本来第2声（低から高へあがる）であるが、末尾のピッチは第１音節の開始時よりかなり低くなる。それに対して【①T】では、第３（第２声）、第４（第２声）音節のピッチが連続して上昇しており、全体的に上がり調子になって自然な韻律を破壊している。声調レベルの学習はできているが、文韻律を学習していない典型例だといえる。

①

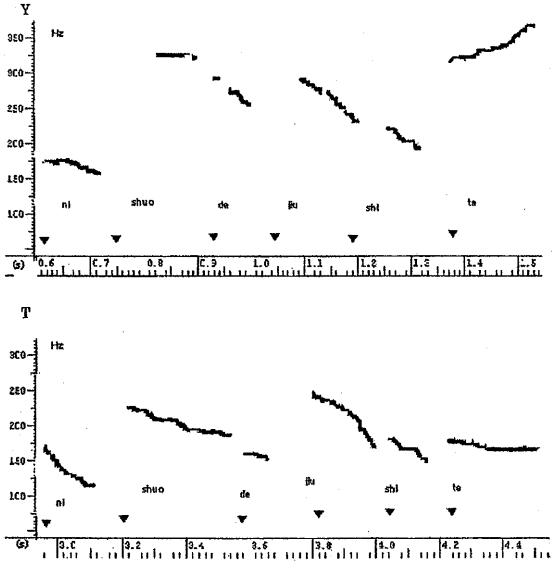


【資料②】昇調（疑問文）

你说的就是他？ Nǐ shuō de jiùshì tā？（君が言ってたのはあの人？）

疑問文は昇調になる。この例文は疑問のイントネーションの例（疑問詞は含まれない）で、【②Y】に典型的な昇調が見られる。第１音節“nǐ”の開始時のピッチと最終音節“tā”の開始時のピッチを比較すると、その差が歴然としている。しかもピッチのレンジがかなり大きいことがわかる。【②T】は、最終音節が低く収まっていること、ピッチレンジが小さい点で、【②Y】に見られる自然な韻律が破壊されている。特に大きな問題はピッチレンジが狭いことである。

②



2　曲がり調子

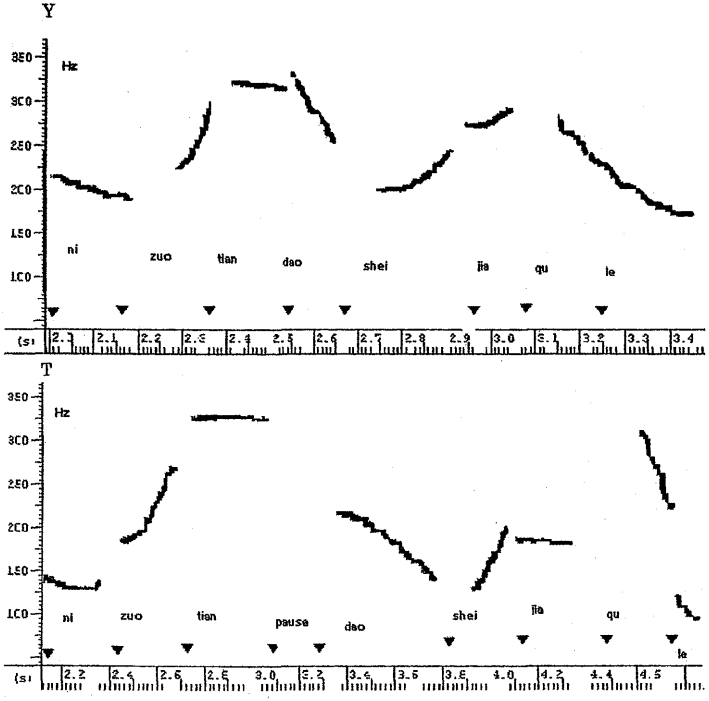
【資料③】凸調（疑問文）

你昨天到谁家去了？Nǐ zuótiān dào shéi jiā qù le？（君、昨日誰ンち行ったの？）

疑問詞疑問文では、調体に疑問詞があると凸調になる。【③Y】を見ると、“zuótiān”（昨日）と疑問詞の部分“shéi”に中位のストレスがかかり、第

１音節と最終音節が低くなって、中高のイントネーションを形成している。【③T】では二つ目の山で韻律が破壊されている。更に、それぞれの音節の長さがほぼ一定しており、日本語のモーラの干渉が見られる。

③

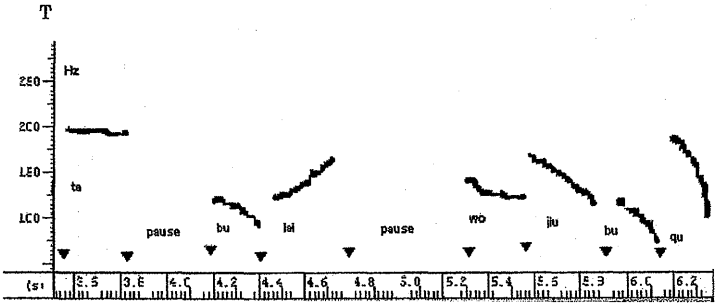


【資料④】凹調（条件文）

他不来，我就不去．Tā bù lái, wǒ jiù bú qù。　（彼が来ないなら、僕も行かない）

短い条件文では凹調になる。凹調は、調頭、調尾の音節の出だしピッチが高く、中程が低い。【④T】では、前半の第４音節“lái”の第２声が際立ち、前半自体が凹調を成している。後半では第２～第４音節までの３音節がすべて第４声であるためか、それに忠実になるあまり自然な韻律の波が破壊されている。このように学習期間の短い学習者は、声調を正確に発音しようとするために、韻律が不自然になってしまう傾向がある。

④



（【④Y】は紙幅の関係で割愛する）

3　同声調の連続

同じ声調の音節が連続した場合、その文韻律は凸調になるということがわかっている。(12) この事実は、残念ながら教学面には全く生かされていない。凸調になるということは、ストレスの置かれる位置が、調体にあるということで、それも教学面ではほとんど取り上げられることがない。その結果は、以下の資料からもはっきり読み取れる。

【資料⑤】第1声の連続

今天刚出生. Jīntiān gāng chūshēng.（今日生まれたばかりだ。）

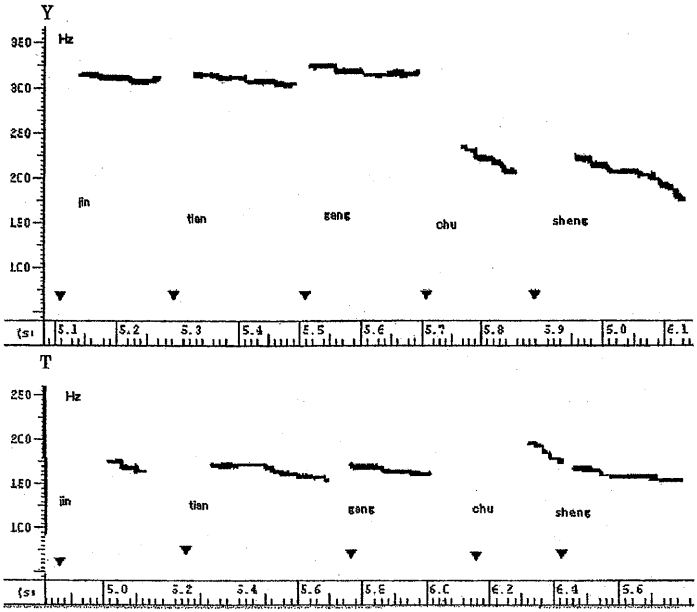
この例文では、すべての音節が第1声で、２音節＋１音節＋２音節の組み合わせの３フット文である。ここでは第３音節“gāng”にストレスが置かれ、それを波峰に持つ凸調の文韻律を示す。【⑤Y】ではそれがきれいに現われている。ところが【⑤T】ではその曲線を示さず、第1声の連続であることをそのまま表すに留まる。ここでもやはり声調のみに終始する学習の結果が現われている。

【資料⑥】第４声の連続

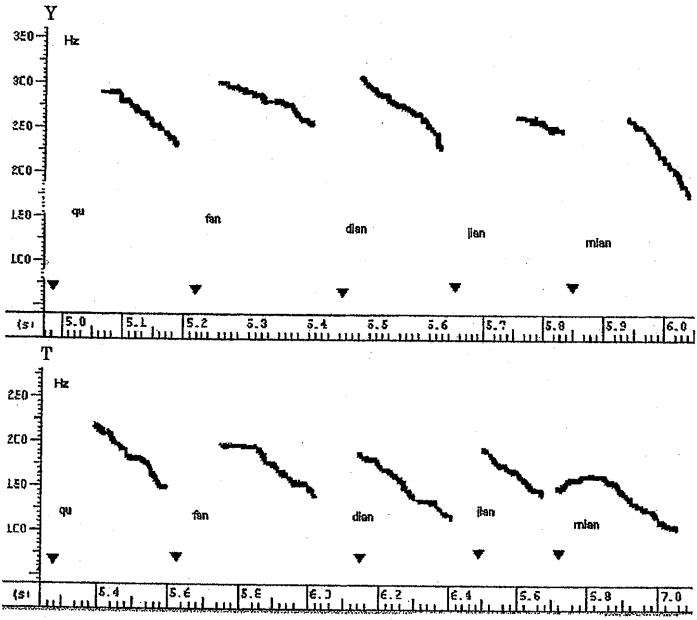
去饭店见面. Qù fàndiàn jiànmiàn.（ホテルに行って会います。）

この例文では、すべての音節が第４声で、１音節＋２音節＋２音節の組み合わせで、第１，２，３音節までが１フットを形成し、合わせて２フットの文になっている。３音節のフットは、第３音節にストレスが置かれ、そ

⑤


Y
Hz
jin
tian
gang
chu
sheng
(s)
T
Hz
jin
tian
gang
chu
sheng
(s)

⑥


Y
Hz
qu
fan
dian
jian
mian
(s)
T
Hz
qu
fan
dian
jian
mian
(s)

の音節のピッチレンジが広がり、そこが波峰になってやはり凸調の文韻律を示す。【⑥Y】ではそれが典型的に現われ、第3音節“diàn”にストレスがかかって、最後はかなり低く収まる。【⑥T】では第4声のパタンが保たれて平行移動しながらdeclinationがかかり、ピッチレンジに変化が見られない。

4　疑問詞の卓立

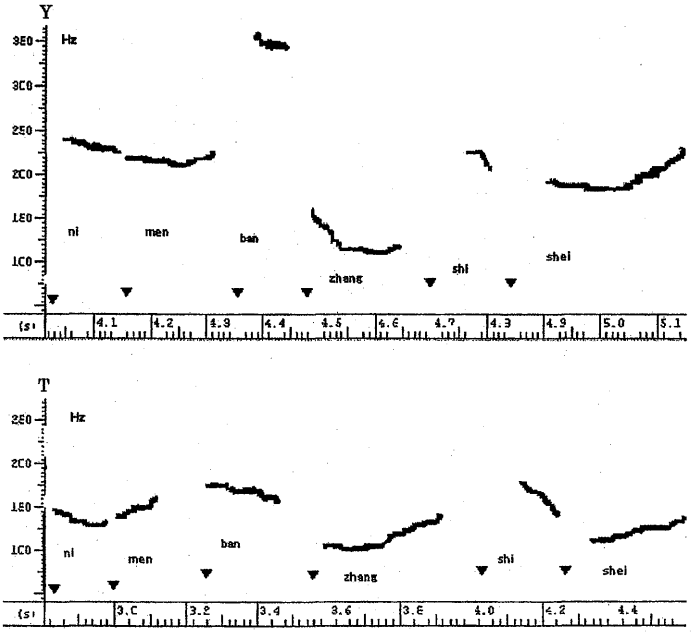
疑問文の中にある疑問詞は、日本語でもそこに卓立現象が現われピッチが高くなるが、中国語でも疑問文の中の疑問詞にはストレスがかかり、独特の文韻律が現われる。調体に疑問詞が置かれる場合凸調になることはすでに見たので、調頭と調尾に疑問詞が置かれた場合を見てみる。

【資料⑦】調尾に疑問詞

你们班长是谁？　　Nǐmen bānzhǎng shi shéi？（君達の班長は誰？）

調尾に疑問詞があるとそこにストレスが置かれ、昇調になる。【⑦Y】では

⑦



“bānzhǎng” のところにストレスが現われていて、一般形とは少し異なってみえる。しかしやはり “shéi” の部分のピッチは全体からみて高くなっている。【⑦T】では、全体的にピッチレンジが狭く、疑問詞にストレスがかかっていない。このような疑問文ではピッチレンジの拡大に特徴が見られ、それを抑えると別の文意を伝える結果になる。ピッチレンジの伸び縮みについても教学面で取上げられることはまれで、その点も問題にしなければならないだろう。

5　考察

以上の観察によって、日本語母語話者Tの中国語文韻律には、

1、ピッチレンジの狭さ

2、ストレスの位置の誤り

3、日本語モーラ長に引きつけた音長の不自然さ

4、声調の正確さへの拘り

といった問題があることがわかった。これらはすべて、これまでの中国語初級音声教育にはほとんど項目として挙げられていないものばかりで、結局のところ、韻律に必要な要素のほとんどが初級段階では全くと言って良い程無視されてきた結果であると言えよう。

1のピッチレンジが狭いという現象と、4の声調のピッチパターンへの拘りは密接な関係があり、声調偏重教育の最大の結果だと言わざるを得ない。初級段階で声調の正確さを追求するあまり、自然な韻律を習得するチャンスが失われる。しかし、もちろん声調の正確さは欠かせないのであるから、このジレンマを克服して両者並び立たせるためには、カリキュラムの根本的な改編しかない。また、最も根強い干渉を示すものとして、3の日本語モーラ長の干渉がある。日本語母語話者はほとんどが日本語のモーラについての認識を持っていないので、フットを基本にした中国語のモーラ長[13]については、さらに気付くはずもない。最後に日本語母語話者が、2のストレスをピッチの高低、または声の大きさに置きかえる傾向があることを挙げなければならない。低く小さい声でもストレスがかかり、そこ

が際立って聞こえるということを実感する瞬間を持たなければ、なかなか納得できるものではないはずである。

Ⅳ　結論——早期韻律教育の必要性

言語の対照研究で長く行なわれてきた、文法における誤用分析のような手法が、生成文法理論の登場以来なりを潜めてしまった背景には、それなりの理由がある。音声の誤用分析的な手法は、誤用を指摘し母語の干渉であることを明らかにすることは可能であるが、それを学習理論と共鳴させて学習効果を引き出す段階に到ると、結局は物理的な仕組みを説いたり、データを見せて学習者自身が試行錯誤できるように環境を整えることしかできない。生成理論は言語生成の深みを探ることを目指したが、誤用分析的手法は、研究成果とその応用との間の深いクレバスに架ける橋が見つけられなかったのである。

第1言語との比較対照は、理解にとって効力があることは確かである。学習者の資質がよければ、ある程度の学習の進展が見られる。もちろん、「習得」という現象を「コミュニケーションがとれる」という段階に留めるならば問題は小さく、これまでのやりかたで十分だとも言えるだろう。しかしもし、「習得」可能性を根本的に見直し、「よりよい結果」に近づけようとするなら、やはり音声教育は言語生成の深みから考え直し、システマティックに構成にし直されなければならない。

音韻論的に解き明かされている中国語音声の構造は、中国語の初級発音教育ではそれが音声そのものであるかのように説明されている。日本語でも事情は同じであって、仮名文字の教育と共に音韻が導入され、それがあたかも実現される音声と同等であるかのように教育される。日本の英語教育でも同様に、発音記号をもとに音韻教育が行なわれる。実現される音声というものがあまりに多種多様であるために、音韻体系がその多種多様さを整理して帰納されたものであるという思考と、「韻律は自然に身につく」という誤った考え方とが相俟って、これまでの音声教育を発展性のないものにしてきた感がある。

しかし、韻律が記述可能な存在であり、しかもその韻律がその言語だからこそ起こり得る範囲の、特有の現われ方をすることが最近になってようやくわかってきた。韻律で区別されるべき人間感情や陳述の型が有限のものに集約できるのであれば、韻律は有限のカテゴリーを持ち、その言語の音声構造に規定された韻律パターンを持つと考えてもよいことになる。韻律のカテゴリーが確定しパターンが分類されれば、韻律教育は飛躍的に進展すると思われる。現在のところは、すでにわかっている部分を把握して、第2言語の自然な韻律を習得する基礎作りをするための枠組みを用意したに過ぎない。今後は韻律学習の優先順位を高いところに置き、発音導入と同等の地位を与えることが必要であると考える。

注

(1) ここでの「韻律」の定義は、「音の高さ、強さ、長さなど音色以外に関係した特徴を韻律的特徴（prosodic feature）ないしは超分節的特徴（suprasegmental feature）と呼ぶ」という、窪薗他『音声』1998 の定義に従い、ある単位（フレーズ、文など）に現れる言語音の超分節的な特徴をもつ現象の総称とする。

(2) 桐谷滋編『ことばの獲得』1999 P52

(3) 「対乳児音声が音韻弁別、節構造の知覚、あるいは語彙理解を促進させる」という実験結果がある（同上書P54参照）。

(4) ここでいう台湾語母語話者とは、所謂閩南語母語話者を指す。詳しくは、「台湾語話者の日本語アクセント考」『日本語と日本語教育』24号1995の注1参照。

(5) 本稿で用いる「日本語」は東京語を、「中国語」は一般に普通話と呼ばれる共通語を指す。

(6) 日本語教育学会編『日本語教育事典』大修館 1982に、「（中国語話者の日本語アクセントは）原則としてすべて０２型であり、尾高型も難しい。１拍語は母音を長音化して頭高型とする傾向がある」との記述がある。

(7) 重松淳「台湾語話者の日本語アクセント考」『日本語と日本語教育』24号 1995

(8) 野澤素子、重松淳「広東語話者の日本語学習におけるアクセントの問題について（１）～（３）」『日本語と日本語教育』27号～29号 1998、1999、2000

(9)　吴汉敏，朱宏达著『汉语节律学』2001 p324の三音節連読変調の記述参照。

(10)　声調が一つの音節の全体にかかるものかどうかという点については議論があり、無声子音はもともと声帯の振動がないため、声調は無声子音の上にはかからないというのが大方の見方ではあるが、最近の生理学的研究では無声子音の発音が開始される時にすでに音声器官に緊張や弛緩などの特徴が現れ、たとえF0がなくてもすでに声調情報として加算されるべき状態になるという。つまり音の清濁にはすでにピッチの情報が盛りこまれているのである。(同上書p311)

(11)　資料は「読みあげる」ことで得た「朗読資料」。読みあげの際に韻律に関わる指示は一切与えていない。【資料①～⑦】で取り上げた例文は『汉语节律学』に載せる例文からとったもの。録音方法は、Y、Tの音声をDAT　TCD-D8で録音し、SFSWin Version1.25(19/04/2001) © 2001 Mark Huckvale University College London を用いて分析した。縦軸はF0のHz、横軸は時間、▼はsegmentの位置を表わしている。但し、得られたピッチ曲線は、取り除けなかったノイズなどを手で修正したもので、イメージ図としてのみ扱う。

(12)　陈文芷「字调和语调」『中国语文』227期 1980

(13)　「モーラ」は、日本語の基本的な長さの単位を指す。「音節」が母音を核にした子音の集まりで、「聞こえ」を中心に捉えられるのに対し、等時性を感じる単位である。

参考文献

窪薗晴夫他『音声』岩波書店（1998)、『音声学・音韻論』くろしお出版（1998）

郡司隆男・坂本勉『言語学の方法』岩波書店（1999）

音声文法研究会編『文法と音声』くろしお出版（1997）

杉藤美代子『日本人の声』和泉書院（1994)、『日本人の英語』同（1996)、『日本語の音』同（1996）

宮地裕他編『日本語の音声・音韻（上下)』明治書院（1988、1989）

桐谷滋編『ことばの獲得』ミネルヴァ書房（1999）

陈文芷「字调和语调」『中国语文』227期（1980）

趙元任『汉语字调跟语调』（1933）（同書は『赵元任语言的论选』清华大学出版社1992所載）

林涛，王理嘉编著『语音学教程』北京大学出版社（1992）

王洪君『汉语非线性音系学　汉语的系格局与单字音』北京大学出版社（1999）

吴汉敏，朱宏达『汉语节律学』语文出版社（2001）
沈炯「北京话上声连读的调型组合和节奏形式」『中国语文』（1994）
重松淳「日本語話者の中国語声調習得考」『中国文学研究』第22期（1996）
野澤素子・重松淳『日本語と日本語教育』24，25，27，28，29号（1995～2001）
重松淳「台湾語話者の日本語アクセント考」『日本語と日本語教育』24号（1995）
日本語教育学会編『日本語教育事典』大修館書店（1982）
K.ジョンソン・H.ジョンソン編『外国語教育学大辞典』岡秀夫監訳　大修館書店（1999）